

いま・未来をみつめての幼児教育

岡田 正章

幼稚園教育要領が近く改訂されようとしている。その基本方向について、教育課程審議会答申のなかで述べられている事項により、本誌前号で河野重男先生が指摘しておられる。ただ、四つの「幼稚園の基本」、三つの「ねらいと内容の改善」の視点は、何れも、教育課程審議会答申の出た昨年十二月より一年三か月前、昭和六十一年九月、文部省初等中等教育局によって特設された「幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議」がまとめた「幼稚園教育の在り方について」のなかで述べられていたものが、そのまま取り入れられたにすぎない。

それらが、何故、いま、取り上げられたのか、それを問うことが、これからの幼稚園教

育の道を確認なものとすることに役立つことと思われる。

その第一は、現在の幼稚園教育は、家庭・地域において幼児たちの発達が阻害されていることに、一刻でも早く立ち向かわねばならないことによる。幼児たちは、少子化時代で家庭で甘やかされ、反面、親の近視眼的な養育姿勢のため教えこまれすぎている。こうしたことが、自主性が弱く、また、自己中心的な人間を生み出す基本的な原因となろうとしている。

幼稚園は、いま、幼児たちが育ちにくくなっている状況から、少しでも本来の姿に戻し、健全な心身の芽を育くむことに格段の努力が望まれている。このためには、幼児が園内において、できるだけ自主的に、かつ、協動的に行動する機会を多くし、具体的・実践的にその力を働かせながら育っていくことが必要である。

したがって、幼稚園では、幼児が興味のあることに自発的にとりくみ、個人的に、あるいは集団的に遊んだり、作業したりすることが非常に重要である。と同時に、敢えて誤解を招くこととは思いつながらであるが、たとえ自分自身でいまやりたいと思っていないことでも、相手の話を聞き、相手の立場を理解するようにし、自分のやりたいことをがまんして、ほかのことをするような経験も、次第に広げていくことが必要である。

こうした意味での真の自主性の芽を、幼児期に如何に育てていくのか、実践をふまえながら、大いに深めていかねばならない。このことは、単に、そのことの意義を子どもに説明してやらせればよいというものでもない。従来、教育の理念として重々わかっているも

のであろうが、なかなか行なえないものである。いまこそ、幼児のために本ものにならなければならない。

第二は、いまの幼児たちが、やがて成人となって活動するであろう未来において、お互いに尊敬し合い、充実した生活を創造することができるよう援助することが重要である。一般に、いまの幼児たちは二十世紀に生きるものであるといわれ、それにふさわしい人間像が描かれている。国際化・情報化・成熟化・高齢化など二十世紀像はさまざまである。

これらの二十一世紀像に生きる人間の基本は、第一にかかわって述べたものと共通とも考えられる。敢えて、さらに敷衍するならば、自己自身の見解を創り、これをきちんと主張できるようにするとともに、初めてのひとにも親しみと思いやりをもって接することができる人間性の持ち主になることが望まれる。

創造性の育成は、フレーベルが世界で幼稚園を創始した原点である。日本人は、いろいろな知識をもっているが、「あなたの意見は何ですか」と問われると、はつきりものいえないひとが多いといわれる。国際的には、こうした面で、日本人が自己変革することが重要である。このことは、幼児期から「あなたはどうか思うの」という教育的関係が重んぜられねばならないことであろう。

また、日本人は、仲のよいもの同志は親しいが、そうでないひととは容易に交流しないいわゆる「島国根性」が強すぎるといわれる。幼稚園で、心身に障害をもっている幼児と

障害のない幼児とがともに生活し合うことによって、後者が必要な援助を行ない、どんなひととも生活をともにする力を身につける。

少子家族、近隣での異年齢集団による遊びの衰退などは、幼児たちの自然な生活のなかでの尊敬・思いやりの心の育ちを困難にしている。幼稚園では、従来以上に、同一年齢の幼児だけによる活動でなく、異年齢の幼児による保育、あるいは、地域の高齢者との交流を組織的にとり入れるなどの工夫をし、どんなひととも交流する開かれた心の芽生えを育てることを大切にしたい。

(明星大学・宝仙学園短期大学)

